

## 地理空間学会ニューズレター 〔第14回大会発表要旨号〕

### TOPICS

- ・大会プログラム（目次）
- ・発表要旨
- ・大会日程

JAGS

○日程・会場（対面形式とオンラインとを組み合わせで実施します）

対面形式：つくば市イノベーションプラザ会議室

|                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| 6月20日（日） 10:00～12:00 | 一般口頭発表（オンライン）      |
| 12:00～13:00          | 昼休み                |
| 13:00～14:00          | 一般口頭発表（対面形式・オンライン） |
| 14:00～14:55          | ポスター発表コアタイム（オンライン） |
| 15:00～16:00          | 会長講演（対面形式）         |
| 16:10～17:20          | 総会・表彰式（対面形式・オンライン） |
| 6月18日（金）～20日（日）      | ポスター発表（オンライン）      |

## 地理空間学会 第14回大会 プログラム

### ● 一般口頭発表

(10:00～12:00、13:00～14:00)

- 101 池田真利子（筑波大）・高濱佑太郎（立教大・学）：ベルリン市の観光街路における言語景観... 2
- 102 柿沼由樹・于 濰赫・大畠拓真（筑波大・院）：シンガポールのチャイナタウンにおける言語景観の地理的分布..... 3
- 103 山下書子・瞿 芳馨・熊谷美咲（筑波大・院）：台北市「大正町」エリアの言語景観にみる日本統治時代の歴史..... 4
- 104 松井 茜（筑波大・院）：軽井沢の言語景観にみる宣教師たちとその時代 ..... 5
- 105 廣部恒忠（明海大）：浦安市の土地利用や人口推移に着目したまちづくりについて..... 6
- 106 渡辺康代（帝塚山大・三重大・非常勤）：「番条のお大師さん」にみる集落の持続性 ―奈良県大和郡山市番条八十八ヶ所詣りとその行事食に着目して― ..... 7

### 昼休み

- 107 岡田晃暉（筑波大・院）：港湾の新自由主義的再開発における場所感覚と表象―イギリス・サルフォードを事例に― ..... 8
- 108 大島規江（茨城大）：島崎藤村『夜明け前』の地理学的一考察―近世頹落期における木曾の庄屋― ..... 9
- 109 田林 明（筑波大・名誉）：日本の農業地域区分に関する研究動向 ..... 10

### ● 会長講演（対面形式）

(15:00～16:00)

- 高橋重雄（青山学院大）：隣接科学における地理学の有用性：経済学分野における個人的体験..... 11

### ● ポスター発表（オンライン）

(コアタイム 14:00～14:55)

- P01 中村瑞歩（筑波大・院）：歴史的町並みにおける河川景観の再生と活用 -栃木県栃木市巴波川を事例に-..... 12
- P02 佐々木悠理（筑波大・院）：宿泊型ゲストハウスの日常性と宿泊施設選択の地理学的研究..... 13
- P03 吉野広人（筑波大・院）：埼玉県朝霞市におけるシェアサイクルの利用の実態 -交通手段の選択に着目して-..... 14
- P04 富田裕也（筑波大・院）：英語圏旅行ガイドブックにみる東北地方におけるインバウンド・ツーリズムの変容..... 15
- P05 清水友輝（筑波大・院）：通勤流動からみた都心回帰下の東京大都市圏における郊外の鉄道新線沿線の都市化―つくばエクスプレス線沿線を事例に― ..... 16
- P06 大沼勇斗（筑波大・院）：京浜地域における国際人口移動とエスニック・セグリゲーション..... 17
- P07 河原昂平（筑波大・院）：空間データを用いた福岡都市圏における都市構造変容の分析 ..... 18

# ベルリン市の観光街路における言語景観

池田 真利子\* (筑波大)・高濱 佑太郎 (立教大・学)

101 キーワード：ベルリン・言語景観・観光街路・夜間経済・観光地化・オンライン調査

## I. はじめに

本研究の目的は、都市空間そのものを舞台とし、そこに表出する「言語景観 (Linguistic Landscape)」を当該地域の歴史的背景や地域的特性、およびその変化と併せて考察することにある。本発表とそれに続く全 4 件の発表は、いずれも言語景観から地域の事象を理解するのに適した地域を対象とする (東独地域の都市更新・シンガポールのチャイナタウンとイギリス統治時代のショッピングハウス群・台北市の日本人街・軽井沢における外国人向け高原避暑地)。そこからみえてくるのは、地域の担い手により個々に更新されながらも緩やかな同質性を有する地域の領域性や、文化としての言語の領域性であり、建造物という物質 (有形) の歴史性と無関係ではない「言語」という非物質 (無形) からみえてくる歴史性である。そこでは、環境決定論や実証主義に違和感を覚え、景観における意味や色彩を捉え、帰納的に理解するカール・サウアーの文化的景観 (Cultural Landscape) や、サウアーの根底にあったゲーテの、観察と実験に基づき現象を経験的に参照する姿勢と根底で繋がる。目下、COVID-19 に起因し海外フィールド調査の物理的制約があるなか、海外市政府の提示するオンライン情報や Googlestreetview 等を利用し、新しい事前調査方法の試験的開発も本発表群の副次的目的である。

「言語景観」は、その概念・調査手法に最初に言及した本邦地理学者の正井 (1969) によると、「言語およびその視覚表現である文字からみた都市景観」と定義された。当該論文は新宿の業種看板や喫茶店の言語景観を中心に、それらが一定の特性を有しつつも欧米化しつつあることを示したものであり、その後、2000 年代に入ると、東京を中心に多文化・多言語化する社会を背景に、言語景観は研究視点・方法として再評価され、社会言語学を中心に研究が多角的に展開しつつある。

## II. ベルリン市の都市変容と観光街路の言語景観

ベルリン市の都市再編や文化の役割は発表者の既往成果に詳しいが、本研究は主に、Papen (2012) により示されたベルリン市プレントラウアーベルク地区 (現、ミッテ地区) のジェントリフィケーションを背景とする Helmholtzplatz 街区の言語景観調査、および 25 件の半構造化インタビューに基づく地域性の考察に着想を得ている。

さて、プレントラウアーベルク地区は、旧東独地域に位置しており、とりわけ 1990 年代半ば以降、賃料上昇、住民の教育レベルと所得向上、そして労働者階級から中流階級への社会階層の変化と著しく変化が起こり、2000 年代後半から 2010 年代に同市ノイケルン地区で確認されたレストランやカフェ、専門店の増加も確認された。19 世紀後半に

建造環境が整備された同街区は、当時のベルリンの基幹産業製造となりつつあった労働者向けにデザインされた 5 階建ての過密住宅地域であり、同時に東独時代の 1980 年代にはドイツ民主共和国の反対運動の重要な拠点であり文化的中心であった。カスタンニアンアレー (Kastanienallee) は、東西再統一後のミッテ地区の商業的中心である Hackescher Markt および WeinsmeisterSt と、週末に蚤の市が開催され、観光客に人気の Mauerpark (ベルリンの壁公園) およびその最寄り駅の Eberswalder Straße を南北に繋ぐ、全長約 1km の街路である。

2021 年 5~6 月に Googlestreetview (2008 年 7 月撮影) および経済アトラス・Google 上で表示される店舗情報、また副次的にウェブサイトや SNS を利用し、同街路の商業利用を網羅的に調査したところ、街路東側全体で 83 件の店舗が確認された。そのうち、サービス業 34 件、小売業は 29 件であり前者はレストラン (13 件)、カフェ・バー (7 件)、ホテル・ホステル 3 件、後者はアパレル (7 件)、本屋・レコード店 (6 件) 等があった。また、これらの店名の言語景観をみると、全体の約 3 割がドイツ語 (28 件) と英語 (23 件) であり、「Kleine Fabrick」(ベビー用品専門店、表記にデザインの要素) や「Lichtblick」(映画館、造語)、「fein und ripp」(オーダーメイド衣料品店、造語) 等のドイツ語のほか、The Future is Up to You (ビーガン料理レストラン) や Caffee Focacceria San Francesco (南伊料理レストラン) 等、独語・英語ともにデザイン性の高い名称が確認された。また、スペイン語・イタリア語・ポルトガル語等 (レストランやカフェ等)、英語・ドイツ語の混用 (Multicult Food というコンビニや Buchbox という本屋) 等も確認された。また店名に Berlin を含むものは 4 件所在した。

## III. おわりに

発表当日は、同通り西側の調査結果を追加報告するとともに、同地区や観光街路の歴史的背景や地域変化、およびメディア表象の変化にも触れ、知見を報告する。なお、Papen (2012) も述べる様に、店名やサインに隠された意味をその生産者に聞かなければ、サインの解釈が一方向的になる可能性がある。また、看板に使用されるデザインや副次的言語情報、字体・色彩等も現地調査でのみ可能な情報である。この点を今後の課題としたい。

### 参考文献

- 正井泰夫 1969. 言語別・文字別にみた新宿における諸設営物の名称と看板広告. 史苑, 29 (2), 166-177.  
Papen, U. (2012): Commercial discourses, gentrification and citizens' protest: The linguistic landscape of Prenzlauer Berg, Berlin. *Journal of Sociolinguistics*, 16(1): 56-80.

## I. はじめに

日本の地理学におけるチャイナタウン研究では、華人社会の形成に関する集落地理学的・地誌学的アプローチが展開されてきたことに加え、チャイナタウンの観光地化や多民族化といった変容の様子についても明らかにされてきた（山下，2019）。こうした状況に伴い、その物理的環境と民族的・言語的特徴が織りなす景観も歴史的に変化してきた。本研究では、シンガポールにおけるチャイナタウンの変容がいかなる形で景観に表れるのかを明らかにすることを目的とする。本発表では、特に建造物に注目し、イギリス統治時代に造られたショップハウス（以下、SH）群の利用形態の変化がいかに進行してきたのかを報告する。

研究方法として、言語景観を手掛かりにした分析を行う。これまでの言語景観研究においては、人口構成と関連した地域の民族的・言語的特徴を明らかにする分析や、観光地化に伴う国際化の状況と関連づけた分析が取り組まれてきている。主に言語社会学を中心として、言語景観分析は多くの場合、地域における多民族化・国際化といった変容を景観から読み解く可能性を持つ方法として理解されている。

## II. シンガポール・チャイナタウンの形成と展開

1820年代のラッフルズによる植民都市の建設において、華人の居住地が南岸地区に定められて以降、華人口は増加を続け、1901年以後はシンガポールの人口の70%以上を占めるまでに至った（山下，1988）。シンガポールのチャイナタウンに特徴的な景観であるSHは、街路に面した1階を店舗、2階以上を住居とした歩廊付きの連続建築であり、規則的な景観と可能な限り多くの華人の居住空間の創出を目的としたコロニアル建築様式である（泉田，1990）。マレーシアから分離独立した1965年以降、都市再開発局（URA）による中心部のスラム化したSHの取り壊しと郊外へのHDBフラット（高層集合住宅）の建設といった再開発が進行し、華人の多くがHDBフラットへ入居した（山下，1998）。しかし1970年代後半になると開発と保存のバランスが意識され始め（張ほか，2001）、1986年には歴史的市街地の保存マスタープランが提示された。現在、残存するSHの多くは保存対象となっている。

## III. 言語景観の地理的分布からみたSH利用の変化

分析の対象として、特徴的なSHが並ぶTanjong Pagar Rd, Amoy St, Mosque StのSHが並ぶ特徴的な3つの通りを選定した。調査

は2021年5月～6月にGoogle street viewを用いて実施し、土地利用、業種、店舗の看板表示に用いられている言語数および種別について記録した。なお、シンガポールの言語政策としては、英語、中国語（簡体字）、マレー語、タミル語の4言語が公用語として定められている。

チャイナタウン南部のTanjong Pagar Rdにおいては、英語の単一言語表示が圧倒的に多く、中国語の表示は劣勢であった。また、韓国語や日本語といった公用語以外の言語表示も多くみられ、これらはそれぞれ韓国料理店、日本料理店の場合に用いられることが多かった。北東部のAmoy Stでも英語の表示が多く、中国語は劣勢であった。韓国語や日本語の表示もわずかにみられたが、Tanjong Pagarに比べその出現頻度は下がった。北西部のMosque Stでは中国語が用いられた中華料理店が多く見られ、その他の店舗では英語表記が多く用いられていた。

シンガポールの公用語以外の言語である韓国語や日本語が、主にTanjong Pagar Rdの景観に表れていることが明らかになった。このことは、SH群が「政府主導・民間事業型」の都市保存制度に置かれることで、華人社会であるチャイナタウンの歴史性としての側面と、利用実態の側面が分離してきているということが指摘できる。

## IV. おわりに

今回の調査からは、特にTanjong Pagar RdやAmoy Stの料理店において韓国語や日本語などの言語表示が見られた。今後は調査対象を広げるとともに、チャイナタウンにおける民族構成の変化や観光地化の状況を検討し、景観に表れるSH利用の変化をチャイナタウンの変容の中で捉える必要がある。

## 参考文献

- 泉田英雄（1990）：シンガポール都市計画とショップハウス．日本建築学会計画系論文報告集，**413**，161-172。
- 張 漢賢，東樋口護，橋本清勇（2001）：シンガポールにおける歴史的市街地の「政府主導・民間提案型」都市保存の制度．日本建築学会計画系論文集，**542**，191-197。
- 山下清海（1988）：『シンガポールの華人社会』大明堂。
- 山下清海（2019）：『世界のチャイナタウンの形成と変容－フィールドワークから華人社会を探求する－』明石書店。

## I. はじめに

本研究は、かつて台北市に存在した日本人街である旧大正町地域（現・台北市中山区）における現在の言語景観を調査対象とする。大正町は、台湾の日本統治時代に整備された居住区で、終戦まで日本人官僚が多く住む高級住宅街であった（片倉, 2017）。終戦後、多くの日本人が台湾を離れ、その後同地域は居住地区から商業地区へと変化し、繁華街が形成された。現在では日本人向けの料理店や喫茶店、バーなどが軒を連ねる。こうした地域の歴史的背景や空間的変化を踏まえつつ、本研究の目的は、当該地域において特徴的な言語景観が見られる裏通りの看板に着目し、言語景観の特性を明らかにすることである。

## II. 調査方法

本研究では、台北市大正町を対象地域とし、日本統治時代からの歴史及び変遷について文献調査を行った。また、旧大正町の林森北路 159, 145, 138, 133, 119, 107, 85, 67 および中山北路 1 段 135, 121, 105, 83, 53, 33 を調査範囲とし、当該地域の現在の裏通りの言語景観を 2021 年 5～6 月にグーグルストリートビューで調査した。なおグーグルストリートビューで確認できる道路沿いの店舗と看板に限定した。分析対象は、店舗の種類と看板の言語種類・表記である。



図 1. 現在の林森北路の様子（グーグルストリートビューで撮影）

## III. 調査結果

大正町の 14 の裏通りで、合計 485 店舗看板の調査から得られた結果は以下の通りである。店舗名の言語種は、中国語と判断できるものが 186 件、日本語と判断できるものは 112 件、英語が 98 件、その他韓国語 3 件、フランス語 12 件、スペイン語 3 件のほか、数字のみの店舗名も 8 件存在した。なお、中国語・日本語の判断ができないものが 13 件確認された。

また、店舗名の表記に関してであるが、店舗のおおよそ半分に当たる 231 件（48%）が漢字のみの表記であった。次いでローマ字のみの表記が 118 件（24%）を占めている。一方で、ひらがなのみは 2 件、カタカナのみは 0 件であった。このほか、漢字と他の表記（ひらがな・カタカナ・ローマ字等）を組み合わせた表記方法が多く見られた。なかでも、漢字・ローマ字表記が 53 件（11%）と最も多く、それに次ぐカタカナ・ローマ字の組み合わせは 19 件（4%）であった。

以上のように、同地域の裏通りにおける言語景観には、日本語の使用および表記としてカタカナやひらがなの使用が多く確認された。

## IV. おわりに

発表当日は、店舗業種の調査結果を追加報告するとともに、同地域の日本統治時代以降の歴史的背景を概観し、現在の調査結果から得られた知見を報告する。また、今回はオンライン調査という方法的制約から、繁華街の景観において特に目立つ要素である、店舗の突出看板とファサード看板のみを分析対象とした。しかし実際の言語景観は、立て看板やポスターなど、その他にも多くの視覚情報を含んでおり、それらを含む総合的な考察を今後の課題としたい。

### 参考文献

片倉佳史(2017): 台湾日本統治時代の 50 年. 祥伝社.

## 軽井沢の言語景観にみる宣教師たちとその時代

104

松井 茜（筑波大・院）

キーワード：軽井沢・言語景観・キリスト教・歴史の道・地名

### I. はじめに

避暑地としての軽井沢は、19世紀に日本に派遣された外国人宣教師たちにより発展していくこととなる。軽井沢に夏の間滞在した宣教師たちは、アジアの高原避暑地に見られるのと同様に英国国教会、メイン・ストリート、郵便局を作り彼らの生活の場を築いていった。1897年には、宗派を超えた集会所および礼拝所となるユニオン・チャーチが設立されるなど、宗派や出身国の異なる宣教師やキリスト教徒によるコミュニティが形成されていった。

軽井沢に滞在した外国人たちは軽井沢の自然を楽しみ、ハイキングの度に小径や見晴らしの良い場所、特徴的な岩や池や山に、英語やドイツ語の地名を付けていったという（軽井沢町誌刊行委員会、1989）。彼らが名付けた地名のいくつかは、現在の地名にも残り、軽井沢の言語景観に外国風の雰囲気を与えている。

本研究では、軽井沢の道路の名称に注目することで軽井沢の近現代の歴史を概観することを目的とする。

### II. 調査方法および調査対象地域

今回の調査では、1930年代に外国人により作成されたと考えられる「MAP OF KARUIZAWA」と現在のGoogleマップおよび2000年代に「軽井沢歴史の道」というプロジェクトで定められた道路の名称を比較することで、1930年代当時と現在の地名の変化を分析する。

調査対象地域は、「MAP OF KARUIZAWA」の範囲内で、「軽井沢歴史の道」プロジェクトでも道路の名称が選定された「旧軽井沢」エリアである。

### IV. 「軽井沢歴史の道」

2000年代に入ると、軽井沢観光協会と軽井沢の居住者・滞在者の有志らにより「軽井沢歴史の道」プロジェクトとして、軽井沢の歴史を背景にした道路の呼称が付けられた。プロジェクトで名称が決められた道路は38本あり、道路の名称の中には外国人宣教師たちが当時使っていたものをそのまま取り入れた例や、近くに別荘を構えた偉人の名前を用いた例などが見られる。

「ハッピーバレー」や「ショー通り」といった地名は、

「MAP OF KARUIZAWA」にも見られ、また現代の道路の名称にも残っている。しかし、名称自体は同じであっても、外国人が馴染みのある外国語で考え当人たちに理解された名称と、現代の日本人が新たに再設定した名称とではその記号の意味は変わってくるであろう。こうした観点は、Scollon and Scollon (2003) において提唱された、言語表記とそれが所在する場所に着目する「地理記号論 (Geosemiotics)」とも類する。

また今回の調査は、地図上の情報のみを調査対象として扱ったため、実際に道標に書かれた各道路の名称などが与える視覚的な情報（景観）についての調査までは至らなかった。今後は、現地調査で視覚的な情報のデータを取得しつつ、軽井沢の道路の名称に関する考察を行うことを課題としたい。



図1 軽井沢歴史の道  
(軽井沢観光協会提供)

### 【参考文献】

軽井沢町誌刊行委員会(1989):軽井沢町誌 (民族編). 軽井沢町誌  
編纂委員会.

Scollon, R. and Scollon, S. W. (2003): *Discourses in Place:  
Language in the material world*. Routledge.



# 浦安市の土地利用や人口推移に着目したまちづくりについて

105

廣部 恒忠（明海大）

キーワード：土地利用・人口・都市問題・まちづくり

## I. 概要

### ・背景(歴史, 地理, 土地利用など)

千葉県浦安市は、全市域面積の約 3/4 を足掛け 17 年にも及ぶ公有水面埋め立て事業により拡張した我が国でも非常に特異な生い立ちをもつまちである。また同市は、この 60 年程の間に、主要なインフラ設備を含む全ての都市基盤に係わる基本構想及び実施計画がほぼ白紙の状態から立案され、自然発生的な集落形成を起源とするまちとは対照的に、緻密に管理及び制御された計画の元でまちづくりが進められた経緯からも、正に“人工都市”と呼ぶに相応しいと言えよう。一方で近年においては、東京の後背地として近隣周辺地域と同様に都心のベッドタウンとして発展してきた。その様な変遷から、土地利用一つとっても特徴が良く表れており、過去のデータでは、全建物の 8 割ほどが住居系であり、また、市域の 6 割を超える宅地の半分程度が住宅用地である。一方、道路用地も 2 割近くを占めており、商業用地、工業・運輸施設用地も各々 1 割を超えている。この様に用途地域制の観点からは、特に、住居系、商業系、工業系用地の指定及び配置、或いはその地域分布に浦安の特色が見られる。加えて、世間でも知名度の高い東京ディズニーリゾートと周辺のホテル群を中心とした観光サービス施設の林立する舞浜地区一帯は、“アーバンリゾートエリア”を形成し、更にその南に位置する工業ゾーンには、金属・鉄鋼を中心とした加工・卸業等の倉庫及び工場群(通称、“鉄鋼団地”)が、東南部の新町エリア方向に延伸しており、これらは今や浦安の“代名詞”ともなっている。

### ・将来人口推計から

平成 28 年 3 月公表の「浦安人口ビジョン」に拠れば、浦安市の総人口は、2020 年代中頃には、ピークを迎え、その後は緩やかな減少傾向を辿ると予想されている。また同報告書は、特に現状の問題点として、①合計特殊出生率の低さ、②子育て世代の周辺地域への流出、③高齢化による人口構成の偏り、の 3 点を取り上げて将来への課題と位置付けている。浦安市の人口動態の一つの特徴として、大学を含む教育機関及び関連施設が多く設置されていることから、15 歳～24 歳人口は、通常、一時的に転入超過になることが多く、このコーホートに関しては、慢性的に最も転入・転出の激しい流動的な人口推移を示している。よって同市においては、子育て世代と併せて卒業後の若い就業世代の人口動態が、人口構成全般に大き

な影響力をもっている。一方で、総数のみならず、人口の地域分布も都市計画上からは重要な視点である。以上の事から、改めて独自に将来の人口推計を行った上で、その経年変化等に関し地域分布を調べた結果、以下に示す様な将来のまちづくりを進める上で参考となる示唆的な兆候を見出した。

- (1) 中町エリアを中心として、将来、人口分布に顕著な偏りが生じる事で、局所的には一種の“ドーナツ化現象”が出現し得る。
- (2) 顕著な人口減少が予想される中町が“バッファゾーン”となる事により、元町及び新町が地理的に分断される可能性がある。
- (3) 上記の(1)或いは(2)などの影響により、市域全体で交流を含めた人的な移動や流動性に、著しい変化が起きる可能性がある。

### ・都市問題について

前項でも指摘した様に、浦安市の人口動態及びその地域分布に著しい変化が生じ、もしそれが一時的でなく中・長期にも及ぶ可能性がある場合には、通常、そのインパクトは決して軽微なものに留まらないが故に、例えば、以下に示す様に、潜在的な都市問題の直接ないし間接的な誘因と成り得る可能性がある。

- (1) 人的移動や流動性の恒常的な変化は、通常、交通量及び手段(traffic modal split)にも顕著な影響を与え、時には不可逆的な変質を来し、混雑現象等を含めて副次的な交通問題を誘発する。
- (2) 中心業務地区(CBD)を含めた近隣商業地域へのアクセスや消費者(購買)行動に至る生活環境全般にも本質的な変化を及ぼす。
- (3) 中町は、特に CBD を含む重要な都市機能が集中している地域でもあり、所謂、“中心市街地の空洞化傾向”の発端とも成り兼ねない。
- (4) 市域外延部へのスプロール現象を加速化させる事で、より一層、都市機能の構造的なアンバランス傾向を促進させる可能性がある。

## II. 代表的な参考文献(一部のみ)

浦安市経営企画部企画政策課編(2001):『浦安市総合計画』浦安市役所。

浦安市市史編纂委員会編(1985):『浦安市史』浦安市役所。

浦安市市史編纂委員会編(1999):『浦安市史(まちづくり編)』、『浦安市史(生活編)』浦安市役所。

浦安市まちブックをつくる会編(1999):『まちづくりがわかる本』彰国社。

日本まちづくり協会編(2002):『地域計画(第2版)』森北出版。

「番条のお大師さん」にみる集落の持続性  
106 —奈良県大和郡山市番条八十八ヶ所詣りとその行事食に着目して—  
渡辺 康代（帝塚山大学・三重大学・非）  
キーワード：環濠集落・祭り・共同作業

奈良県大和郡山市番条集落では、4月21日に集落各戸の大師像をお詣りすることで四国八十八ヶ所詣りができる、ミニ巡礼が現在もおこなわれている。「お大師さん」の名で親しまれている番条の八十八ヶ所詣りは、村人の間では、江戸時代の末期、ちょうど88軒の家があったので始まったという話が広く伝えられている。

1933（昭和8）年に大師堂の時の住職が書いた「由来書」によると、1830（文政13）年に番条村でコレラが流行し、村人が申し合わせて弘法大師を信仰することになった。四国八十八ヶ所を巡拝した村人が、本尊像を頂いて帰ったことがはじまりと伝える。

1815年の佐保川の洪水、1830年のコレラの流行によって、番条の人々が大いに不安を抱いたことは想像に難くない。1830年には、大和一円で御蔭参りが流行した。番条集落における八十八ヶ所詣りの開始から、幕末の自然災害・病気・世情不安を少しでも抑えたい集落の人々の祈りと、集落各戸の平等な行事参加への切り替えを読み取ることができる。

離村の際には、各戸でお祀りしてきた弘法大師像（お大師さん）を隣近所や親戚、お寺（阿弥陀院）に必ず預けるようにしてきたため、今日に至るまで、八十八の大師像が1つも欠けずに伝存されている。

番条集落は、中世には番条荘と呼ばれ、大乘院方の興福寺衆徒であった番条氏の本拠地であった。集落内の阿弥陀院の五輪塔には「番条長懐」の名前が見える。『大乘院寺社雑事記』によると、番条長懐父子は一乗院方の筒井順永と対立していて、1459年8月に筒井一党に攻められて館が焼き払われ敗れた。その戦いの際、番条荘の郷民も堀（濠）に落ち、死者が多数にのぼったという。このことから、15世紀半ばの番条は堀（濠）を備えた環濠集落であったと判断される。

佐保川左岸の自然堤防に立地する番条環濠集落には、洪水被害を最小限にするため、竹林で補強した土塁の一部が現存している。加えて、中世（15、16世紀）においては、遮蔽し敵から攻め込まれにくくするため、竹槍などの武器や生活用具を作るためなど、竹林の有用性が発揮されていたものと想定される。

出開帳は、1年の初めの初大師（1月21日）、春の大師（4月21日）、そして盆大師（8月21日）と3回行われていたが、明治末頃から春の大師だけになったという。21日は弘法大師の月命日であるが、盆と正月の大師祭りは廃れても、

なぜ4月21日の春の「お大師さん」は続けられてきたのだろうか。

現在も4月21日におこなわれる「お大師さん」では、集落の各戸が思い思いに花を飾り、高野豆腐やイチゴなどのお供え物をして各戸に伝わる弘法大師像をお祀りするが、なかでも筍は各戸の供物の共通項である（図1）。

春祭りとしての「お大師さん」は、番条集落を取り囲む竹林の維持管理を集落全戸でおこなっていく仕組みづくりと合わせて存続されてきたものと想定される。中世動乱期の後も集落の竹林や環濠を存続させてきたのは、集落の人々による日々の手入れと共同作業であった。加えて、筍の収穫期にあわせて、料理し、お供えし、お大師さんを祀る集落の女性の貢献があつてはじめて「お大師さん」は成立する。これまでさまざまな祭りを成り立たせるための前提条件としてきたために注目されることが少なかった女性の貢献について、明らかにしていく必要がある。番条集落の人々の、集落各戸が竹林や環濠を共に掃除し守っていく働きと、お供え物を拵え「お大師さん」を守っていく心情と働きが、ともに集落を存続させてきた大きな力であった。日頃の共同作業の積み重ねが、集落とその祭り行事の持続性を形成していると言えよう。



図1 六十九番の玄関先に祀られたお大師さん（2016年4月21日撮影）



# 港湾の新自由主義的再開発における場所感覚と表象

107

## ーイギリス・サルフォードを事例にー

岡田 晃暉（筑波大・院）

キーワード：港湾・ウォーターフロント・新自由主義・表象・場所感覚

### I. はじめに

概念としての新自由主義の台頭がもたらした影響について、ミシェル・フーコーは、競争性が善悪の判断基準として普及した結果、社会的活動や文化も含めあらゆるものが「経済的対象」とみなされるようになったと指摘した（清水, 2017）。このような新自由主義の定着は、都市イメージの地位をグローバルな資本市場における都市の競争力を保証する不可欠の条件（ムニョス, 2013）へと変容させた。この都市における「表象」の変化は、特に 1970 年代以降の港湾都市における再開発において顕著に表れている。しかし、そのような「表象」の変化は、都市の、ひいてはそこに住む人々の「場所」と結びついたアイデンティティを揺るがす可能性を孕んでいる。そこで本研究では、港湾における「表象」の変化とそれに伴う「場所感覚」の揺らぎについて、レルフ（1999）の場所論を援用しつつ、具体的な事例を基に検討することを目的とする。

### II. サルフォード・キーズの概要

サルフォード・キーズ（Salford Quays）は、イングランド北西部のマンチェスターに隣接する運河沿いのウォーターフロント地区である。船舶輸送の需要減を背景とした衰退を問題視されていた同地区では、1980 年代以降新自由主義的な施策を用いた再開発が推進された。その結果、BBC の一部スタジオの移転先に選ばれたほか、数多くのオフィス、小売店、ホテル、レストラン、パブ、高級住宅などが立地するようになり、港湾の産業的な景観は一新された。

### III. サルフォード埠頭のイメージ

観光客、転入者、そして民間投資を志向した、観光・投資・不動産などに関するウェブページを資料として用い、現在のサルフォードにどのようなイメージが与えられているのかを分析した。その結果、利便性、娯楽性、創造性が強調されていることが示唆された。

### IV. サルフォード埠頭をめぐる場所感覚

サルフォード・キーズは再開発以前、サルフォード・ドックス（Salford Docks）という名称でよばれていた。サルフォードにおける「場所の記憶」についての先行研究では、インタビュー調査によってドックスとキーズという名称がそれぞれ再開発前後の場所イメージと密接に結びついていることが明らかにされている（Catalani and Panas, 2015）。したがって、サルフォードでは世代間における場所に対するアイデンティティに大きな差異が存在すると考えられる。また、サルフォードではドックス時代の遺構である大型クレーンの撤去についての対立があった。この対立をめぐる現地メディアの記事およびそれに寄せられた匿名のコメントを資料として分析をおこなった結果、立場や利害を反映しつつ、住民間で表象に基づいた場所感覚が多様化しつつあるということが明らかになった。

### V. 今後の課題

本研究では、研究資料が文字データに依存している。そのため、今後は聞き取り調査をもとにサルフォード・キーズに関わる様々な立場の人々の場所感覚の変化を捉えることが必要である。

### 【参考文献】

- 清水習（2017）：新自由主義研究とは何か。同志社大学政策科学研究, 19, 245-259.
- Catalani, A. and Panas, P. (2015) Owing memories: a tale of two cities. *International Journal of Heritage and Sustainable Development*, 4, 57-65.
- Muñoz, F. (2008): *Urbanización. Paisajes comunes, lugares globales*. Editorial Gustavo Gili. ムニョス, F. 著, 竹中克行・笹野益生訳（2013）：『俗都市化－ありふれた景観 グローバルな場所－』昭和堂.
- Relph, E. (1976): *Place and Placelessness*. Pion. レルフ, E. 著, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳（1999）：『場所の現象学－没場所性を越えて－』筑摩書房.

## 島崎藤村『夜明け前』の地理学的一考察

108

### —近世頹落期における木曾の庄屋—

大島 規江（茨城大）

キーワード：人文主義地理学・文化地理学・自然主義文学・幕末維新时期・『夜明け前』・木曾

本研究は、歴史小説とされる島崎藤村の『夜明け前』に表現された近世頹落期における木曾の庄屋をめぐる物語の舞台の地域性に着目しながら、「血につながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさと」の一端を地理学的に考察しようとする試みである。物語の舞台である馬籠は木曾谷に位置する山村である。しかし、これは物語の展開される近世頹落期、すなわち幕末維新时期においては当てはまらない。幕末維新时期の馬籠宿／馬籠村は中馬で栄えた宿場町であり、馬籠は物資および情報の行き交う交通の要所であった（宮地 1999, 宮地 2015）。そこで、江戸末期の中山道を通じた金銀および塩の流通と国学思想の流入と、明治期の中山道を通じた木材および生糸の流通と西洋思想の波について先行研究を基に整理した上で、『夜明け前』の主人公青山半蔵の苦悩の源泉を歴史的・地域的・社会的背景を諦観することを目的とする。

初恋「まだあげ初めし前髪の～」を含む詩集『若菜集』（1896年）によって24歳で文壇に登場した藤村は、詩人として頭角を現す。『若菜集』に続いて3冊の詩集を立て続けに出版し、一躍ロマン派詩人となった。しかし藤村は、次第に七五調という韻文での表現に手詰まりを感じて散文へと移行していく。とりわけ、詩作から小説へと作品の主軸を移したフランスの自然主義文学者エミール・ゾラのとった「環境」や「遺伝」によって登場人物の言動を説明しようとする試みに強い影響を受ける。ゾラの出世作であり代表作である『居酒屋』（1877年）は、「パリの場末の汚濁した環境のなかでの、ある労働者一家の避けることのできない転落」を描いている。ゾラのそれは、哲学者・批評家・文学史家イポリット・アドルフ・テーヌ（Hippolyte Adolphe Taine）や遺伝子学者プロスペル・リュカ（Prosper Lucas）などの理論を参照しつつ、文学作品における人々の言動を当時の流行であった人種（≡遺伝）・環境（風土や社会構造）・時代の3要素に落とし込みながらストーリー展開するものであった。欧州において自然主義文学とは、人種・環境・時代によって物事が決定されるというある種の環境決定論的展開

を以て、それとされていた。しかし、藤村は、元来日本においては意識されなかった「個」を前面に押し出し、「個をさらす」ことを以て自然主義文学と捉えた。

いずれにしても「個をさらす」、つまり「世間へ告白をする」という（藤村の理解した）自然主義文学を志向した彼は独自のスタイルを築き上げていく。しかしながら、小説家として軌道に乗るまでには時間を要し、その間には1歳の三女縫子（1905年）、4歳の二女孝子（1906年）、6歳の長女みどり（1906年）を相次いで栄養失調で亡くした。極貧のなか執筆・自費出版を続け、ついに日本における自然主義文学作品の白眉とされる『夜明け前』（1929年）を発表する。『夜明け前』は中山道の宿場町馬籠で本陣・庄屋・問屋を務めた島崎家の17代当主であり神官であった父正樹をモデルとした主人公青山半蔵を取り巻く人間群像を描いた小説とされる。父正樹と母縫の四男として生を受けた藤村は、幕末維新时期の動乱のなかで苦悩し精神を病み座敷牢に死した父正樹を遠巻きに見ながら、木曾の庄屋を取り巻く人間模様を赤裸々に、すなわち「個をさらす」ことで（西洋で言うところの「懺悔」として）「世間に告白」したものである。発表では、先述したように、物資の流通と思想の流入の二側面から『夜明け前』に表現された主人公半蔵（≡父正樹）の苦悩の源泉について触れる。

#### 【参考文献】

- 桂島宜弘（200）：『幕末民衆思想の研究—幕末国学と民衆思想—』。文理閣。
- 岸野俊彦（1998）：『幕藩制社会における国学』。校倉書房。
- 高木俊輔編（2003）：『伊那・木曾谷と塩の道—街道の日本史—』。吉川弘文館。
- 宮地正人（1999）：『幕末維新时期の社会的政治史研究』。岩波書店。
- 宮地正人（1999）：『夜明け前』の世界の歴史学的解明—幕末期中津川国学史料の収集と公開—。文部省科学研究費補助金研究成果報告書。
- 宮地正人（2015）：『歴史のなかの『夜明け前』—平田国学の幕末維新—』。吉川弘文館。

10

## 隣接科学における地理学の有用性：経済学分野における個人的体験

### 会長講演

高橋 重雄（青山学院大）

大塚地理学，フィールドワーク，地域活性化，GIS

地理学に関する教育・研究を専門的に行うことのできる大学は限られる。大学での教育・研究職に就く場合でも、多くが隣接科学の学部等において地理学の教育・研究に従事することになると思われる。そこでこの講演では、経済学部就職した私の体験に基づき、地理学のこういった面が隣接科学において役立つと考えられるのかを検討したい。

地理空間学会での講演ということも踏まえ、ここでは次の2点についての検討を行いたい。①地理学分野に関しては筑波大学の前身と位置付けることができる東京教育大学、東京文科大学、東京高等師範学校の伝統ともいえる「大塚地理学」の薫陶を受けて、私も大学生・大学院生時代を過ごした。その時の経験が、経済学部就職してから役に立っている。②今日急速に普及しているGISは地理学的な思考を深める上で極めて有用なツールであり、隣接科学とくに社会科学分野においても有用なものと評価される。

まず「大塚地理学」の点について検討したい。高野（1999）によると、1923年（東京高等師範学校時代）から1947年（東京文科大学時代）まで田中啓爾が「地誌学が地理学の本命である」という立場で地理学教室を指導したことから「地誌学派」というべきものが形成され、その基盤の上に青野壽郎（1947年東京文科大学～1965年東京教育大学教授）が主宰した日本地誌研究所が『日本地誌』全21巻（1967～1980年）を完成させたことで、「大塚の地理学」が特色づけられたという。

私が東京教育大学理学部地学科地理学専攻に学部生として入学したのは筑波大学への移転を控えた1973年であったが、各種の野外実験（巡検）に参加し、またその後進学した筑波大学地球科学系の研究生・大学院生としても巡検に参加し、地域調査の基礎を学ぶことができた。フィールドワークは地理学だけで行っているわけではないが、市川（1985）は地理学特有のフィールドワークについて論じている。地理学分野で培ったフィールドワークの経験は、経済学部就職後、学部として地域活性化に関する学生の取

り組みを始めることになった際に、担当教員として大いに役立った。

2019年の『経済地理学年報』（第65巻第1号）では「関係人口」からみた大学教育における地域フィールドワークという特集を組み、そこでは「経済」「環境」「観光文化」など異なる学部所属する教員関わった実践例が報告されている。大学への社会的要請の変化に伴い、こうした取り組みは今後も増えていくことが予想される。地理学分野で培ったフィールドワークの素養を活用する場が増えていくと思われる。

私の所属する経済学部には複数の地理学出身者がいることから、他大学の経済学部との違いを出そうと2001年度からGIS教育の準備を始め、2003年度から学部生向けの授業を開始した。2008年度からは大学院生向けの授業も始め、現在に至っている。大学・学部の理解もありGISの授業専用の教室を用意し、またGIS授業の受講者でなくてもESRIジャパン社のGISソフトを使える環境が整っている。こうした取り組みは、複数の地理学分野出身者がいたことから可能になったと考える。その後、相模原市役所職員へのGIS研修を行うなど、幅を広げた活動を行っている。

河端（2015）によると、経済や政策に関わるGIS文献数が増えているという。GISのスキルを磨くことは、経済学や関連分野の職場において、地理学の知見も含めて活かしていくことが期待できる。

市川健夫（1985）：『フィールドワーク入門—地域調査のすすめ—』古今書院。

河端瑞貴（2015）：『経済・政策分析のためのGIS入門』古今書院。

高野史男（1999）：創立時から今日までの思い出 大塚の地理学を筑波の地に。筑波大学地球科学系 人文地理学・地誌学分野編『筑波大学地球科学系 人文地理学・地誌学分野の四半世紀』、12-14。

## 歴史的町並みにおける河川景観の再生と活用 ー栃木県栃木市巴波川を事例にー

中村 瑞歩（筑波大・院）

キーワード：巴波川・河川景観・水質汚濁・環境保全・歴史的町並み

### I. はじめに

近代まで、川は物資の輸送の結節点および生活用水や工業用水といった資源を得るための空間として利用されていたが、それらの機能が衰退した高度経済成長期には水質汚濁が社会問題となることもあった。これに対し、1970年代頃から水資源の価値の見直しがされ、環境保全が唱えられ始めた。

さらに、用水路や舟運の場として使われていた川など、時代の趨勢によってその機能が失われた景観を観光資源としてまちづくりを行う地域も現れた。本研究では、歴史的町並みと共に川を観光資源とする地域において、行政・地域住民・観光客といった活動主体と景観の関係や、景観に変化が及ぼされる要因を明らかにする。

### II. 研究対象地域

本研究の対象は、栃木県栃木市を流れる巴波川である。巴波川は1984年と1987年に「日本で2番目に汚れた川」（関口，2001）となり、行政や地域住民が積極的に水質の浄化、すなわちかつての景観の再生に取り組むようになった。また、現在では、巴波川を利用した観光活動が盛んに行われている。

### III. 研究方法

水質汚濁が問題となる1970年代以前と、歴史的町並み観光を推進する上で水質汚濁が問題となった1980年代以降に分けて、行政文書・行政の広報誌・新聞記事といった文献調査によって行政や地域住民の景観の再生活動を明らかにし、景観への姿勢の変容についても考察する。また、近年になって巴波川を舞台に行われる観光活動について、文献調査や聞き取り調査を行い、景観が持っていた歴史的な文脈に加えて、新たに付与された景観への意味を考察する。

### IV. 結果と考察

高度経済成長期以後、地域住民の環境意識低下などの影響により、生活排水が大量に流入し、巴波川の水質は悪化していた。さ

らに、水質汚濁による河川景観の悪化は、1970年代後半から栃木市において芽生えた、舟運で栄えた「蔵の街」をテーマとした歴史的町並み観光にも悪影響を与えていた。

巴波川の景観の位置づけが変化した転機は大きく分けて、水質汚濁の改善のための取り組みが本格化した1990年代と、遊覧船運行といった新たな活用が始まった2000年代前半の2回ある。巴波川の景観のありかたを変化させた要因は、その両者に共通して地域住民が内発的に行った活動であると言えるだろう。1990年代では地域の歴史に対する誇りをもととした環境保全活動、2000年代前半では地域の歴史を活かした観光活動が、それまで積み重ねられてきた巴波川の景観のありかたを変化させた。1990年代に従来から行われていた歴史的景観の修景施策と、水質浄化という地域住民が積極的な参加とが結びつき、巴波川の景観が再生され、2000年代前半の新たな活用の創出につながったのだろう。すなわち、栃木市では、蔵などの建築物の景観と巴波川の自然景観が両輪を成すことによって、「小江戸」で「蔵の街」の景観を掲げる観光活動が活性化したと考えられる。

### V. おわりに

地域の象徴として地域住民の誇りとなる景観は、行政による修景の取り組みと、地域住民や観光客によって与えられる無形の意味が両方そろってこそ完成し、新たな活用につながる。特にそれらの調和の重要性は、公共の空間としての意識が強いと考えられる河川景観にこそ強調して言えるのではないだろうか。

### 【参考文献】

- 関口忠男（2001）：蔵の街・栃木市巴波川における官民一体の清流復活への取り組み．土木学会誌，86，7，41-43.
- 松崎憲三編（2010）：『小京都と小江戸：「うつし」文化の研究』岩田書院.



## P02 宿泊型ゲストハウスの日常性と宿泊施設選択の地理学的研究

佐々木 悠理（筑波大・院）

キーワード：ゲストハウス、宿泊型ゲストハウス、観光、テキストマイニング

### 1. はじめに

昨今のインバウンド需要や観光需要の増加とともに、ゲストハウスという新たな宿泊形態も観光地を中心に増加傾向がみられている。ゲストハウスに代表される新たな宿泊施設の台頭は、宿泊ニーズや旅行に対する価値観の変容に対応したものであるといえる。海老澤(2001)や有馬ほか(2009)によると、情報化社会の発達などを背景に、若者の認識する身近な空間（日常）が拡大し、日常と非日常との混在した新たな空間を求める観光行動が生じているという。また、ゲストハウスは日常に類似した異日常の空間、つまり日常と非日常（既存の観光空間）との境界領域、を提供することにその独自性があるとされている（林 2015）。しかしながら、ゲストハウスに関する研究において、主な関心はゲストハウスのもつ交流スペースとそこで行われる交流や地域住民との関係、街づくりの視点であり、ゲストハウスの持つ魅力については、低価格さや交流以外の宿泊施設の雰囲気や空気感に言及しているものは少ない。

以上を踏まえ、今後の観光空間を理解する上で、若者観光者の新たなニーズに対応する宿泊形態であるゲストハウスの特性を分析する必要があり、また、これまであまり議論されてこなかった“交流”や“価格”以外のゲストハウスの魅力を明らかにすることで、現代日本における日常性の意義を問うことができるだろう。本研究では、宿泊者の宿泊施設選択とゲストハウスのもつ日常性に着目しながら、ゲストハウスの魅力としての日常性を検証することを目的とし、その過程として幅広く宿泊者の宿に対する印象を捉えることを目的に宿泊施設のレビュー分析をテキストマイニングの手法を用いて行った。

### 2. 宿泊施設レビューの分析

宿泊施設のレビュー分析を行うにあたり、浅草寺から半径 3km 以内の宿泊施設かつゲストハウスの定義に該当する宿泊施設を楽天トラベル、Tripadvisor の 2 種類の宿泊施設予約サイトを用いて探索しレビューの取得をウェブスクレイピングにて行い 31 軒の宿のレビュー（合計 993 件）を抽出した。その後、KH Coder<sup>1</sup>を使用し、形態素解析を行った上で各種分析を行った。図 1 は複数の分析

結果の一つである共起ネットワーク図である。結果として各分析において肯定的な評価語との結びつきがみられる語として「場所、立地、駅、親切、フレンドリー、施設、設備、シャワー」が見られた。この結果は先行研究で述べられていた価格や宿泊者同士の交流とはことなる点が評価されていることを示している。また、各分析において見られた日常的な要素である主な語をまとめたところ、全体的に肯定的な評価としてレビュー中に用いられていることが

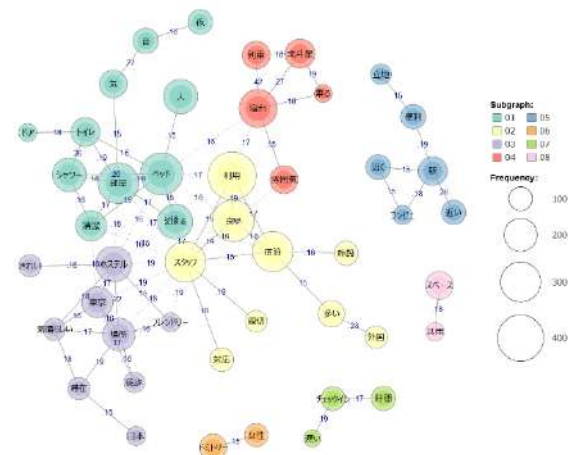


図 1：宿泊施設レビューの共起ネットワーク図

わかった。

### 3. おわりに

以上の分析の結果をまとめると、これまで注目されていた魅力の他に「立地」、「運営者との交流」がゲストハウスの魅力として宿泊者に捉えられている可能性がレビューの分析より明らかになった。加えて、日常的な要素についても肯定的な評価が主であり、魅力の一つとしての日常性を補強する結果となった。

#### 参考文献

- 有馬貴之ほか(2009) 若者のレクリエーション行動からみた偕楽園という観光空間。観光科学研究, 2, 49-63.
- 海老澤昭郎(2001): 観光における非（異）日常と日常のボーダーレス化。長崎国際大学論叢, 1, 63-70.
- 林幸史・藤原武弘(2015): 旅行者が交差する場としてのゲストハウス：交流型ツーリズムの社会心理学的研究。関西学院大学社会学部紀要, 120, 79-87.

ウェアである。

<sup>1</sup> KHCoder は樋口耕一が作成した自然言語処理の要素技術を用いた計量テキスト分析・テキストマイニングのためのフリーソフト

# 埼玉県朝霞市におけるシェアサイクルの利用の実態 -交通手段の選択に着目して-

吉野 広人\* (筑波大・院)

P03

キーワード：郊外・シェアサイクル・都市交通・持続可能性

## 1. はじめに

シェアサイクルとは「相互利用可能な複数のサイクルポートが設置された、面的な都市交通に供される自転車貸出システム」である。自転車の貸出箇所と返却箇所が異なっても良く、基本的に 24 時間いつでも貸出・返却が可能なのが特徴である。日本国内ではシェアサイクルの導入事例が増加しており、さらに都市部のみならず郊外部での事例も増加している。シェアサイクルを対象とした研究事例は増加しているが、観光利用を主目的としたものが多く、通勤・通学等を含めたシェアサイクルの利用実態を明らかにした研究は少ない。本研究は、埼玉県朝霞市におけるシェアサイクルの利用実態の把握を通してシェアサイクルの役割と課題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 朝霞市のシェアサイクルの現状

朝霞市は埼玉県南東部に位置し、東京都心から 20km 圏の距離に位置している。2015 年の国勢調査によると、昼夜間人口比率は 84.1 である。市内は台地に河川が入り込む起伏に富んだ地形からなり、自転車走行の障害となり得る高低差が市内各所に存在している。

朝霞市では 2019 年 1 月からシェアサイクルが導入され、2020 年 8 月現在でシェアサイクルのポート密度(ポート数を自治体面積で除した数)が 6.22(ポート/㎢)で、朝霞市で運用されているシェアサイクルブランドの中では日本一となっている。運営企業による 2020 年 8 月度月次報告書と朝霞市役所に対する聞き取り調査によると、貸出回数は新型コロナウイルスの影響を受けつつも順調に増加している。しかし、自転車再配置にかかるコストや全導入車両が電動アシスト自転車であるがゆえの導入コストの高さなどから、事業の収益化にはユニークユーザー(1 ヶ月に一度でも市内でシェアサイクルを利用したユーザー数)が現在の 2 倍、およそ 1 万人に増やす必要があるとの見込みである。

本研究では、朝霞市内在住者のシェアサイクルの利

用実態を明らかにするためにアンケート調査を行った。調査票は市内のポートのうち利用者数が多く、かつ住宅地内にある 5 つのポートから半径 100m 以内にある住宅に配布した。調査票では、シェアサイクルの利用者に対しては利用経路や利用頻度、利用理由などを問い、非利用者に対してはシェアサイクルの目撃経験や利用しない理由などを問うた。計 877 件をポストに投函する形で配布し、紙の調査票により 94 件、インターネットでは 14 件を回収し、回収率は合わせて 12.3%であった。シェアサイクルの利用経験(n=108)は、利用経験ありが 22 人、無しが 86 人であった。アンケート調査からはシェアサイクルを利用している市民はそれほど多くないことが明らかとなった。利用しない理由として最も多く挙げられたのは、「既に自転車を保有している」ということである。一方で、利用理由として多く挙げられたのは「費用の安さ」、そして「移動の不便さの改善」である。

## 3. 朝霞市におけるシェアサイクルの役割と課題

月次報告書および筆者が実施したアンケート調査より、利用者の多くは通勤時にシェアサイクルを利用していることが明らかになった。また、利用の多い経路・ポートの分析から、利用者の多くは市内在住者ではなく、朝霞市への来訪者であることが明らかとなった。市内在住者は自転車などの交通手段を既に保有しており、シェアサイクルを利用する積極的な理由に乏しい。しかし、利用者が多くない一方で、アンケート調査および聞き取り調査によると、非利用者の多くは日常的にシェアサイクルを目にする機会があるため、これを身近に感じていることが明らかとなった。また、聞き取り調査では、市内の自転車移動には電動アシスト式が必須だという意見も聞かれた。アンケート調査からも同様の要望が確認できたことから、朝霞市においてシェアサイクルの利用を促進するには、電動アシスト式車両を導入することが有効であると考えられる。

# 英語圏旅行ガイドブックにみる東北地方におけるインバウンド・ツーリズムの変容

P04

富田 裕也（筑波大・院）

キーワード：インバウンド・ツーリズム，東北地方，テキストマイニング，メッシュマップ

## I. 研究目的・研究方法

本研究では、英語圏の旅行ガイドブックを用いて、記載された観光資源の空間分布や記述内容について出版年数に応じた経年的な分析を行い、東北地方におけるインバウンド・ツーリズムの変容について明らかにすることを目的とする。

研究対象は、英語圏の主要な旅行ガイドブック出版社である lonely planet 社の「lonely planet Japan」の中から、1<sup>st</sup> Edition（1981 年出版）、7<sup>th</sup> Edition（2000 年出版）、16<sup>th</sup> Edition（2019 年出版）の 3 冊を選定した。

本研究は、英語圏の外国人観光者を対象に、東北地方の各県における記述内容の変化と観光資源の空間分布の変容という観点から分析、考察を行う。観光資源の空間分布は 5km 平方のメッシュマップを用いて分析し、記述内容は「KH Coder」を用いたテキストマイニングと、観光資源の記載数と種類別構成比の変化により分析した。

## II. 結果・考察

記載内容の分析からは、宮城県、青森県、福島県のような県内観光の中心地のイメージが 1981 年からあまり変化しない県と、岩手県、秋田県、山形県のような県内観光の中心地のイメージが大きく変化する県が示された。各県で観光資源のイメージにも変化がみられ、近年になるにつれて特に温泉地としてのイメージが強くなる県が多かった。また、東北地方の主要な交通手段の記載数は鉄道とバスが多く、2000 年と 2019 年では観光案内所や宿泊施設といった、観光行動全体で必要になる情報の記載数が増加したことが明らかになった。

次に、観光資源の記載数と種類別構成比の分析結果を表 1 に示した。外国人観光者の東北地方における観光需要は、1981 年は自然に関連する観光資源、2000 年は伝統的な文化や地域の歴史に関連する観光資源の出現割合が高く、2019 年は碑・像やスキー場の構成比が増加するなど、観光需要の多様化傾向がみられた。また、その地方特

有の歴史や文化、伝統と、その地域の自然からなる景観やアクティビティ等が、地方における観光需要となり得ることが明らかになった。宿泊施設は、近年になるにつれて高級なホテルや旅館の志向が強まり、温泉旅館の記載数も増加した。飲食施設は、日本や東北地方特有の食事を提供する施設の記載数が多く、近年になって飲食施設の種類も多様化の傾向がみられた。

観光資源の空間分布の分析からは、東北地方全体の観光資源の空間分布が 1981 年では県内各地に分散していたが、年数の経過とともに各県の主要都市や主要観光地へ集中する傾向がみられた。このことは、各新幹線の開通や JAPAN RAIL PASS の利用の拡大、上述した観光需要の変容が主な要因であると考えられる。

表 1 観光資源の分類と出現数（割合）の変化

| 大分類     | 小分類       | 1981年      | 2000年      | 2019年      |
|---------|-----------|------------|------------|------------|
| 歴史観覧施設  | 史跡        | 0 (0.0%)   | 4 (2.2%)   | 4 (3.5%)   |
|         | 神社        | 21 (18.3%) | 32 (17.9%) | 17 (14.8%) |
|         | 城郭・城跡     | 2 (1.7%)   | 6 (3.4%)   | 3 (2.6%)   |
|         | 庭園        | 0 (0.0%)   | 1 (0.6%)   | 0 (0.0%)   |
|         | 碑・像       | 0 (0.0%)   | 0 (0.0%)   | 3 (2.6%)   |
|         | 建造物       | 2 (1.7%)   | 11 (6.1%)  | 6 (5.2%)   |
|         | (小計)      | 25 (21.7%) | 54 (30.2%) | 33 (28.7%) |
| 文化観覧施設  | 博物館       | 5 (4.3%)   | 29 (16.2%) | 10 (8.7%)  |
|         | 美術館       | 0 (0.0%)   | 6 (3.4%)   | 3 (2.6%)   |
|         | 記念館・文化館   | 1 (0.9%)   | 5 (2.8%)   | 3 (2.6%)   |
|         | 図書館       | 0 (0.0%)   | 0 (0.0%)   | 1 (0.9%)   |
|         | 水族館       | 1 (0.9%)   | 0 (0.0%)   | 0 (0.0%)   |
|         | 醸造所       | 0 (0.0%)   | 1 (0.6%)   | 1 (0.9%)   |
|         | (小計)      | 7 (6.1%)   | 41 (22.9%) | 18 (15.7%) |
| 景観観覧    | 展望台       | 6 (5.2%)   | 0 (0.0%)   | 0 (0.0%)   |
|         | 郷土景観      | 4 (3.5%)   | 9 (5.0%)   | 2 (1.7%)   |
|         | 都市景観      | 8 (7.0%)   | 0 (0.0%)   | 0 (0.0%)   |
|         | (小計)      | 18 (15.7%) | 9 (5.0%)   | 2 (1.7%)   |
| 自然・保養施設 | 山岳        | 8 (7.0%)   | 6 (3.4%)   | 6 (5.2%)   |
|         | 高原        | 1 (0.9%)   | 0 (0.0%)   | 0 (0.0%)   |
|         | 湖沼        | 6 (5.2%)   | 5 (2.8%)   | 2 (1.7%)   |
|         | 河川・峡谷     | 2 (1.7%)   | 2 (1.1%)   | 3 (2.6%)   |
|         | 滝         | 0 (0.0%)   | 1 (0.6%)   | 2 (1.7%)   |
|         | 海岸・岬      | 5 (4.3%)   | 3 (1.7%)   | 4 (3.5%)   |
|         | 岩石・洞窟     | 2 (1.7%)   | 1 (0.6%)   | 2 (1.7%)   |
|         | 公園・国立公園   | 3 (2.6%)   | 3 (1.7%)   | 5 (4.3%)   |
|         | 温泉        | 6 (5.2%)   | 9 (5.0%)   | 6 (5.2%)   |
|         | (小計)      | 33 (28.7%) | 30 (16.8%) | 30 (26.1%) |
| アクティビティ | スキー場      | 1 (0.9%)   | 2 (1.1%)   | 5 (4.3%)   |
|         | ハイキング     | 12 (10.4%) | 13 (7.3%)  | 8 (7.0%)   |
|         | ロープウェイ    | 0 (0.0%)   | 0 (0.0%)   | 2 (1.7%)   |
|         | クルーズ      | 8 (7.0%)   | 3 (1.7%)   | 4 (3.5%)   |
|         | フェリー      | 5 (4.3%)   | 0 (0.0%)   | 0 (0.0%)   |
|         | サイクリングロード | 0 (0.0%)   | 1 (0.6%)   | 0 (0.0%)   |
|         | (小計)      | 26 (22.6%) | 19 (10.6%) | 19 (16.5%) |
| その他     | 祭り        | 5 (4.3%)   | 22 (12.3%) | 9 (7.8%)   |
|         | ショッピング施設  | 1 (0.9%)   | 4 (2.2%)   | 3 (2.6%)   |
|         | ツアー       | 0 (0.0%)   | 0 (0.0%)   | 1 (0.9%)   |
|         | (小計)      | 6 (5.2%)   | 26 (14.5%) | 13 (11.3%) |
| 合計      |           | 115        | 179        | 115        |

P05

# 通勤流動からみた都心回帰下の東京大都市圏における 郊外の鉄道新線沿線の都市化 —つくばエクスプレス線沿線を事例に—

清水 友輝（筑波大・院）

キーワード：通勤流動・大都市圏の構造変化・郊外の就業核・鉄道新線・

つくばエクスプレス・筑波研究学園都市

## I. はじめに

本研究では、東京大都市圏の外延的拡大が収束し、都心回帰および都市圏縮小が進行している状況での、鉄道新線開通に伴う郊外の沿線地域の都市化の特徴を、通勤流動を指標として検討した。都市化をはかる指標として人口や土地利用、商業機能の変化なども挙げられるが、通勤流動の変化は、居住や就業の変化の影響や中心都市との結節性の強化を反映し、中心都市との関係性を踏まえつつ郊外の都市化の様相を示す指標として重要と考えられるため本研究で採用した。

東京大都市圏では、雇用の郊外化、都市圏の多核化、人口の都心回帰、郊外の衰退といった構造変化がみられた。このため、構造変化後に開通した鉄道新線では沿線の都市化の様相が変化した可能性が予想されるが、既存研究では十分に検証されていない。

ここで、東京大都市圏の中でも、特に東京大都市圏の構造変化が顕在化した後に開通し、沿線の都市化が急速に進行している、つくばエクスプレス線（TX）沿線に着目し、東京都市圏パーソントリップ調査のデータを分析し変化を考察した。

## II. 東京大都市圏における通勤流動の変化

東京大都市圏全体では、人口の都心回帰が継続し、居住地として都心が選好されている。一方、郊外では特に2008-2018年において、鉄道新線沿線などを除き概ね東京都区部への通勤率が減少している。谷(2002)で報告された東京都区部への通勤圏の縮小は現在も継続していると考えられる。

## III. TX沿線における通勤流動の変化

TX開通の結果、TX沿線、特に外部郊外において急速な人口増加、東京都区部への通勤者数の増加が進行した。交通便利性の上昇に伴う通勤者数増加は田口(2001)の知見と共通するが、TX沿線では郊外方面への通勤流動も活発化し、特に外部郊外では筑波研究学園都市への通勤者数が増加し

た。TX沿線の外部郊外は東京通勤者に限らず筑波研究学園都市通勤者の居住空間にもなっている。このためTX沿線の外部郊外は、東京の郊外としての機能と筑波研究学園都市の郊外としての機能を併せ持っているといえる。

## IV. 郊外の就業核の影響

郊外方面への通勤流動の多寡は郊外の就業核の有無に規定されると考えられる。ここで、都心方面への定期券乗車利用者数に比べた郊外方面への定期券乗車利用者数の割合に着目する。平成27年度都市交通年報によると、TX沿線の外部郊外は、強い就業核をもたない北総線沿線外部郊外と比較して値が高い。すなわち、郊外方面への通勤者数が比較的多いといえる。また、同一路線でもこの値は郊外の就業核の周辺で大きく変化する。例えば、JR東北本線の場合は大宮駅より南側では値が比較的大きいが、大宮駅を越えた北側では値が小さくなる。

## V. おわりに

TX沿線では、郊外の就業核として筑波研究学園都市を有する。郊外方面への通勤者数が多く、大都市圏中心都市と郊外核が通勤先として機能し、沿線地域が両地域の郊外ともいえる点で、専ら東京の郊外として扱われてきた既存の鉄道新線沿線との相違点をもつ。人口の都心回帰・都市圏縮小が進行する東京大都市圏におけるTX沿線、特に外部郊外での都市化の背景の1つとして、都市圏の多核化が挙げられ、郊外の就業核たる筑波研究学園都市の存在が影響を及ぼしていると考えられる。

## 文 献

田口 淳 (2001)：北総線開業による千葉ニュータウン入居者の居住地移動と通勤行動の変容．地理学評論，74A，305-324.

谷 謙二 (2002)：1990年代の東京大都市圏における通勤流動の変化に関するコーホート分析．埼玉大学教育学部地理学研究報告，22，1-21.

# 京浜地域における国際人口移動とエスニック・セグリゲーション

P06

大沼 勇斗 (筑波大・院)

キーワード：空間的自己相関・東京大都市圏・Empirical Bayesian Kriging・インナーシティ問題

## I. 研究課題

本研究は、外国人「移民」が実質的に存在している日本において、特にグローバル化の最前線である東京都区部及び隣接する川崎・横浜一帯を加えた京浜地区を対象として、外国籍住民の棲み分け(エスニック・セグリゲーション)に焦点を当てた人口分布の現状について明らかにすることを試みる。

本研究では三つの研究課題を提示してそれぞれ分析を行う。第一に京浜地区における外国人の集住程度を確認することであり、次にその集住地域における民族構成の特徴を把握することであり、最後に外国人の集住化と関係してインナーシティ問題に繋がると考えられる地価の変動や日本人人口の流出に関して検証する。

## II. 研究方法

具体的な手法としては、行政が公開している 2020 年の統計資料や 2010 年及び 2015 年の国勢調査のデータを取得して地理情報システム(GIS)を利用することにより外国人住民の分布や増減を地図上で表現するほか、各区における国籍別外国人数、京浜地区における地価の変動及び日本人人口の増減を可視化する。

集住地域を確認する手段としてローカル・モラン統計量を用いた空間的自己相関分析を行うほか、地価変動の地図を作成するにあたっては点状の公示地価を参照に Empirical Bayesian Kriging を用いた空間補間を実施した。

## III. 研究結果及び考察

外国人の集住程度に関する可視化で最も特徴的だったと思われる発見は外国人の集住地区が千代田区を軸にしてその円周上に分布していたことであり、またその円周上の分布の外にも円状の集住地区が存在していたことである。中心地区に集住が発生している横浜や川崎においては、同様の傾向が見られなかった。増加数についても既に外国人が集住している地区でより多くの外国人が流入してくるという累積性の傾向が確認できたほか、空間的自己相関分析により外国人の集住分布がランダムなものではなく周辺の影響を互いに受けて地理的特性を構成する空間的自己相関性が確認できた。

京浜地区各区の民族構成については東京都区部と川崎・横浜地域において多くの共通点を有する一方で特徴的な違いが幾らか存在した。その一つは都区部では殆ど見られなかった南米系の集住

が横浜の鶴見区や金沢区で確認できたことであり、その背景として工業地帯との関係が考えられる。また共通する特徴として中国系と韓国・朝鮮系は広範囲に分布しており、中国系は殆どの区で最大の規模を占めた。またネパール系が中心部に集住する傾向があるのに対して、フィリピン系は中心部から離れた区に集住する傾向が見られたほか、連続する幾つかの区で北米・ヨーロッパ・オセアニアを合わせた欧米系の集住が確認でき、港区と渋谷区、目黒区、そして横浜の都筑区では欧米系が最大の外国人集団となった。欧米系の多かった地域では中国系が少なかったことから何らかの理由による相反性が示唆される。

インナーシティ問題に関係する要素である地価の変動と人口流出の検討については、地価は全体的に上がっているため地価の低下と外国人の増加という関連はインナーシティで見られなかった。その一方で地価の上昇が停滞している地域では日本人人口の流出が確認でき、結果として地価の変動により増減が左右されない外国人が流入して数を増加させている現象を幾つか確認できた。ただし空間的自己相関分析を行ったところ、江戸川区の一部を除いて日本人の減少と外国人の増加が同時に有意になる地域は見つからなかった。ゆえに現状としては流出と流入はそれぞれ存在するものの、それをインナーシティ問題として結びつける関連性については弱いものとなった。

本研究の分析を通して、エスニック・セグリゲーションやインナーシティ問題の可能性について完全な解明にまでは至らなかったものの、これまで判然としなかった集住地域の状況に関する基盤的な情報に加えて、外国人住民の増加傾向を探索する過程においては、新しいエスニックコミュニティが今後発達する可能性がある潜在的地域を提示することができた。

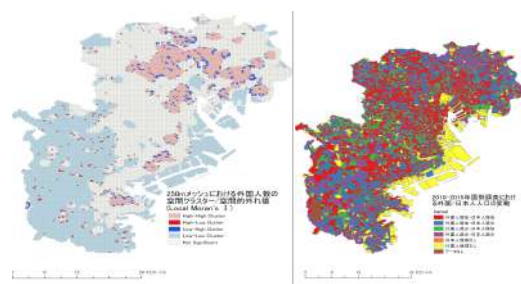


図1 外国人集住に関する自己相関分析(左)および外国人人口と日本人人口増減に関するクロス集計図(右)



# 空間データを用いた福岡都市圏における都市構造変容の分析

河原 昂平\* (筑波大・院)

P07

キーワード：都市構造・都市成長・郊外化・住宅地地価・住宅供給・福岡都市圏

## I. 研究背景・目的

日本国内では、今後も人口減少が継続していくとみられ、日本国内の人口増加と都市圏拡大の中心は東京大都市圏であり、一極集中の問題は増大する。しかし、日本の地方都市や中核都市の中で、福岡都市圏は、傾向として他市町村を巻き込みながら成長する例外的な事例と考えられる。

そこで本稿では、福岡都市圏を対象に、人口や住宅地地価、住宅供給といった空間データを分析して福岡都市圏における都市構造の変容と成長過程について明らかにし、当都市圏の拡大・構造変容の特徴を考察することを目的とした。そして、日本の3大都市圏や他の地方中核都市、欧米の大都市圏と比較した福岡都市圏の特徴を明らかにした。

## II. 研究方法

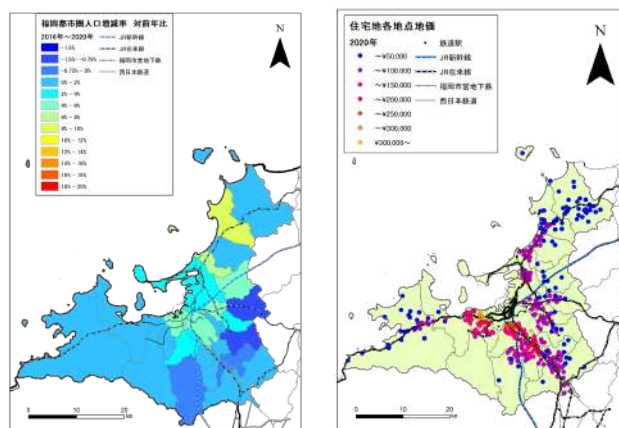
本稿では、考察や分析に際し、熊野 (2017, 2018) の手法を参考に、大阪大都市圏を対象としていた研究を福岡都市圏に当てはめて分析を行なった。特に都市を構成する要素である人口・住宅地地価・住宅供給に着目し、福岡都市圏各市町・各地点における経年変化を捉えた。そして、昭和終わりから現在までの大都市圏や他都市の構造変容と比較した福岡都市圏の特徴について分析した。

## III. 研究結果・考察

各要素の分析から、バブル期の初めごろから郊外化が進行しており、その後バブル崩壊後から2000年代、2010年代前半にかけて、福岡市内への人口の都心回帰が進んだ。住宅地地価や住宅供給量に関しても福岡市中心部では郊外と比較して高く、多い状況であった。つまり、3大都市圏や地方中核都市、また日本の傾向とは反対の傾向を示す欧米諸国の都市などと同様に郊外化や都心回帰が進行していることが明らかとなった。特に主要路線・鉄道沿線の市町村での人口増減や地価の上昇・下落等の変動が顕著であり、鉄道の開通や駅開業のインパクトが非常に大きく関係していることが明らかとなった。また、特に各要素の中でも人口増加率と地価上昇率は、改めて強い相関関係があること

も明らかとなった。

しかし、福岡都市圏において明らかになった最大の特徴は、2015年以降の人口増加や地価上昇が福岡市内だけでなく、周辺市町でもみられるようになっている点である。この変容は他の都市圏と逆行する傾向であり、都市圏全体での成長がみられる。博多や天神といった中心部の成長・拡大とともにその動きを受容し、郊外地域も発展・拡大しつつある。九州各地や福岡県内から人・物が集まるという社会・経済的な中心都市の性格が表れており、都市圏全体の再発展・再拡大、そして都市成長は今後も継続するだろう。



(左) 図1：2016年～2020年福岡都市圏人口増減率

(右) 図2：2020年福岡都市圏住宅地各地点地価

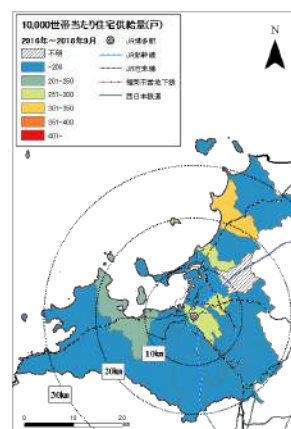


図3：2016年～2018年9月福岡都市圏10,000世帯当たり住宅供給量



---

地理空間学会第14回大会発表要旨集  
〔地理空間学会ニューズレター第35号〕

2021年 6 月20日発行

印刷・発行

地理空間学会

---